

げられたが、目下兩名共、英國に在つて、土木事業に従事されてをる。元來名文家の君は故東京帝國大學名譽教授チャンバレン氏と同時代の親友であつて、チャンバレン教授の名著は、直接間接君の力に待つものが多かつたさうである。君はチャンバレン教授が、昨年ジュネーブに於て長逝される最後迄、其友人として常に信書を往復されてをつた。君は一九二四年(大正十四年)以來本會の終身會員となられ、爾來其逝去の年即ち一九三五年(昭和十年)の十一月十八日に至る迄、本會の英文出版物にして、君の援助を荷はないものはないと云つても可い位、本會の研究所は、君の盡力に負ふことが多大であつた。君の如き獨り我が國明治文化の開拓者であつたのみならず、その一生を終はる迄、沒我奉公、日本文化の對外事業を完全に聲援された英國紳士の好典型であつたと云へるのである。本會が君の健筆に負ふ所は筆紙に盡し難い。爰に深く君の長逝を哀悼する。

故仙石子爵を追悼す

本會評議員
貴族院議員

關 屋 貞 三 郎

本日は本會に功勞のあつた物故會員諸氏の追憶會が催されるに就て、故仙石子爵と同僚であつた私にも何か話をするやうにとの事であるが、子爵の擔任してゐられたのは宗秩寮の仕事であるから、其の役向に關することは申上げられない。それで茲には主として子爵の性格に付き二三の事をお話致したい。

子爵は比較的交際の狭い方であつたから、性格は多く知られてゐないが、極めて邪まな事の嫌ひな、眞直な人であつた。宗秩寮總裁として、華族たちの人事上の世話をする事は其の要務の一つであつたが、それ等の事柄は極めて複雑で到底理窟一方では片づかない。時としては友人關係者から注文もあれば又依頼もあるといふ風で、中々處決がむづかしい。ところが故人仙石子爵は、其の間に立つて、實に公明正大、酷評すれば融通が利かなすぎると云つても可い位、眞直に信條を守つて、宮内省の立場を明らかにされた。言葉を換へて申せば、極めてむづかしい所を毅然として乗り越えて堂々と處理された。其處に子爵の面目があつた。

と申すと、或は冷淡といふ風に取りられるかも知れないが、一面又暖い同情心があつて、殊に部下の爲には、或は親しく病氣見舞に行くとか、心配を分つとか、實に行き届いた親情を盡された。其の點で今日なほ感謝の聲を耳にする程である。

又、官僚の常として、役柄の昇進を好むのは一種の弊であるが、仙石子爵に限つて、そんな心は露ほどもなかつた。大正十年私が宮内省に入つた時に、子爵は書記官であつたが、其の後諸陵頭になられ、それから間もなく政府から望まれて賞勳局總裁となられた。それは加藤(友三郎氏)内閣の時であつたが、總理が態々宮内省に來て言はれるには、賞勳局は榮典の授與を掌る大切な所であるから、總裁には人格のふさはしい人が欲しい、それには華族がよいと思ふが、適任者が無い、就ては仙石子爵なら此上もないと思ふが、是非御盡力を願ひたいとの事であつた。そこで其の事を宮内大臣に話すと、大臣も同意されて、早速仙石子爵に旨を傳へられた。すると子爵は「私は宮内省で使つて戴ける間は、是非こゝにゐたい、外へゆく氣はない」と云つて榮轉を斷られた。其の後に賞勳局總裁となられたのは、政府の懇望によ

つて宮内大臣初め我々が是非にと勧めた結果である。

以上は仙石子爵の性格の一端に過ぎないが、是等の事だけを見ても、如何に子爵が名利に淡い公直廉潔の人格者であつたかゞ分るのであつて、天が若し此の上に若干の年を假すならば、將來は必ず貴族院に於ても重きを成したに違ひないと思はれるのであるが、比較的多病で、其の爲に早く薨せられたのは、遺憾に堪へない事である。

故ステewart君との辱交

本會理事
文學博士

加藤 玄 智

本會の終身會員であつたステewart君の事に就ては、既に林會長のお言葉があつたが、故人とは特殊の個人的關係があつた私として一言哀悼の辭を述べたい。諺に「縁は異なるもの」と言ふが、我々兩人間の相識關係が恰もそれに當つてゐる。私は大正十三年に關係學校から差遣されて約半年程歐羅巴に行つてゐたが、歸途はアメリカ經由の管であつたのを圖らずもスエズ通過で歸つた。其の船中で初めてステewart君に遭つたのである。そして船中生活約四十日の間にスツカリ親しくなつて、其の時恰も携へてゐた假印刷の英文古語拾遺を一緒に修訂し、それが縁で爾後死に到る迄親交を續けたのみならず、本會の爲にも種々盡力して貰つた。例へば本會紀要には毎卷必ず歐文で、其の卷の收載論文要旨を掲げる事にしてゐるが、あれは毎回ステewart君が必ず目を通して忠實に朱筆を入れて下さつたものである。そんなわ